

特別支援学級における自閉症教育推進のための教育課程の編成案～自立活動を中心に～

【論点】

2年間の研究において、知的障害特別支援学級の自閉症教育の実態を調査するとともに、小・中学校における特別支援学級での自閉症教育の教育課程の編成の在り方、自立活動などの指導内容を検討しました。

【研究を行った背景】

本研究は、「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」の自閉症教育の提言や、発達障害者支援法、通級による指導の対象者の分離（自閉症者と情緒障害者）、また情緒障害特別支援学級の名称変更（自閉症・情緒障害特別支援学級）等、近年の自閉症教育にかかる現状を踏まえ、小・中学校における特別支援学級での自閉症教育の教育課程の編成在り方、自立活動などの指導内容を検討することを目的としました。

【研究協力校における自閉症教育を推進するための特別の教育課程の編成】

特別支援学級の教育課程の編成について、研究協力校の聞き取り調査から次のことが明らかになりました。

①特別支援学級では、自閉症スペクトラム障害(以下「ASD」)のある児童生徒の有無にかかわらず、個々の実態把握から交流及び共同学習の内容を決定し、時間表を作成していました。②時間表作成においては、特別支援学級在籍児童生徒の交流及び共同学習に配慮して、特別支援学級の時間表を先に決定する学校と、反対の方法をとる学校と2通りありました。③自立活動の指導では、高機能の場合、時間を特設して指導を実施(通級のイメージ)。知的発達の遅れがあるASDの場合は、合わせた指導で実施していました。④ASDのある児童生徒が混在している学級では、場の構造化、クールダウンエリアの設定指導グループの編成、視覚情報の活用等に配慮していました。

【研究協力校におけるASDのある児童生徒の自立活動の聞き取り調査から】

特別支援学級のASDのある児童生徒(25名：小1年～中3年：知的発達の程度は標準～中・重度)の自立活動の指導について、研究協力校における聞き取り調査から次のような結果を導き出しました(一部その結果を掲載します・下表)。

自立活動の内容	児童生徒	支援の程度	頻度	自立活動の指導内容等に関する整理				
				具体的な困難さ	キーワード	生じる行動の背景要因	指導場面	指導内容・方法
偏食や決まった服しか着ないなど、特定のものや行動に対する強いこだわりに関する指導	25(中3男・軽度)	一部支援必要	1	起きた事象のみで善悪を判断する。特定の人の強い嫌悪感を持ち、全て否定的に受け取る。	セントラルコーレックス/こだわり	特定の人への固執、嫌悪状況 全か無かの極端な捉え方	授業(国語)本人が困難を示したとき	因果関係を明確に説明する。 状況理解等の教材を用いての指導をする。 他者理解
	8(小2男・軽度)	常時支援必要	1	時間に対するこだわりが非常に強い。チャイムの会食や下校時刻に活動等が終了していない。「時間が無い!時間が無い!」と大泣き、大暴れを起こす。母親、電車の時刻が少しでも遅れるとパニック。	こだわり/不安感	時間への脅迫観念の強い		活動や生活パターンの確立。 学校生活や学級生活における見通しを伴った配慮や工夫を実施。 不安感を持つような場面を意図的に設定し、予防的に対応方法を指導している。
	7(小1・中)	常時支援必要	1	野菜など嫌いなのは受け付けない	偏食	偏食	給食	量を減らして少しずつ食べる
	3(小1男・軽度)	常時支援必要	2	様々な場面でこだわりがある 体育や集会では一番後ろに並ぶことによりこだわりがある。	こだわり	数に対するこだわり		個別指導では、こだわりが起きやすい場面や状況を設定して、適切な言動ができるよう意図的に指導をする。 SSTにおいて、運動課題やゲームの課題を通じて、こだわりに対する自己コントロール等の指導を実施する。
	6(小1男・中)	常時支援必要	4	物や形や場所に対して強いこだわりがある。何にこだわっているのか見極めが難しい時がある。制止させるとパニックになる。また、ごっこ寝転ぶ。	こだわり	こだわりや活動に見通しを持たないことへの不安感		観察記録の中で本人のこだわりを解明し、そのこだわりをどの程度認めるか判断して、条件をつけて許可する。
5(小1男・中)	一部支援必要	5	給食の時間になると、準備は意欲的にするが、一切食べずに机の下に潜ってしまう。	こだわり	こだわりや認識不足による偏食	給食	食べ方を提示するなどして興味を持たせ、おかずを選択するようにして、少しずつ食べる種類を増やしていく。	
安心できる場や気持ちの安定につながる活動を設定して、情緒の安定を図ることに関する指導	2(小1男・標準)	常時支援必要	1	負ける場面や自分の思いが通らない時は、特に言動をコントロールすることが難しい。 じゃんけんやゲーム等の負け、自分の意見が通らない場面では、暴言を吐く、寝ころぶ等興奮することがよく見られる。	こだわり/状況把握	勝敗に対するこだわり		クールダウンエリアの活用方法を指導している。 個別指導では些細なことでも改めて強化する。
	15(小4・中)	常時支援必要	2	活動の見通しを持たないと泣いてしまう。	見通し/不安感	何をしたらいいかわからない状況	学校生活全般	場の構造化
	3(小1男・軽度)	常時支援必要	2	こだわりからくる不安感が強まるとパニックになる	こだわり/不安感/パニック	こだわり/不安感/パニック		個別指導では、こだわりが起きやすい場面や状況を設定して、適切な言動ができるよう意図的に指導をする。 SSTにおいて、運動課題やゲームでの課題を通じて、状況に応じた対人関係の取り方、こだわりに対する自己コントロール等の指導を実施。
	1(小1男・標準)	常時支援必要	2	できない場面の泣き等が不安感の裏返し。 じゃんけんやゲーム、体育等において負けることが予想される活動は最初からやらない。強く進めると大泣きするなどのパニックが見られる。	こだわり/不安感/パニック	勝敗に対するこだわり		個別指導や小集団指導において、見通しを持たせ工夫や環境の整備の実施。 真摯な心がけ
	17(小5男・標準)	一部支援必要	2	不安傾向大 学習全体に自信がなく、集団の中では萎縮する傾向がある。自己主張ができない。	不安感	学習への自信喪失、集団への不安		個別指導、小集団指導、合同学習を実施。 体育は苦手な本人の能力と興味関心に合わせて参加を決定している。 高学年になっているので、不登校傾向に関しては自らコントロールできるように指導を実施している。
	22(小6・軽度)	一部支援必要	2	わからない、できないと泣いたり怒ったりする	不安感	分からない/できない場面	授業(特に国語・算数)	スモールステップの指導
	14(小4女・中)	一部支援必要	3	課題の量が多いと活動が止まってしまうが、最後までしなければならぬという気持ちが強く、気持ちが混乱してしまう。	こだわり	自分が認識する課題へのこだわり	授業全体	課題の量を最初から調節したり、自分から「減らしてください」と気持ちを伝えるような体験をたたりする。
	8(小2男・軽度)	常時支援必要	3	時間に対するこだわりが非常に強い	こだわり/見通し	時間に対するこだわり		活動や生活のパターンの確立。 学校生活や学級生活における見通しを伴った配慮や工夫を実施。 不安感を持つような場面を意図的に設定し、予防的に対応方法を指導している。
	21(小6女・重度)	常時支援必要	3	情緒不安定になる。耳ふさぎ、寝転がる。教室から逃げ出す。友達にあたる。	不安感/過敏性/拒絶し/不安感	音の過敏性、集団との距離		教室の中に拠点となるようなあんしんできるスペースを確保し、その場所にいることを認める。
	10(小3・軽度)	一部支援必要	4	活動の見通しを持たないと泣いてしまう。	不安感	キーパーソンがいないことへの不安感	学校生活全般	キーパーソンを明確にする

【調査結果】

自立活動の聞き取り調査からは、①自立活動の指導内容として、「余分な不安感をもたせないように活動の見通しがもてるようにする」「支障となるこだわりを軽減する」「自己コントロールやセルフマネジメントスキルの獲得を指導する」「状況把握や相手の心情等を理解させる」「適切な対人関係を築くためのコミュニケーションスキルの獲得を指導する」等、児童生徒の実態に合わせた多様な指導が散見されました。

②指導における背景要因としては、「特定の人や物への固執」「時間や数への脅迫的思い」「変化への不安感」「スキルの般化困難」「他者の心情理解の困難」「感情表現の乏しさ」等が想定されました。

③指導における具体的困難さと行動の背景要因から、自閉症の特性と想定される内容をキーワードで示すと、「不安感」「こだわり」「固執」「セントラルヒーレンス」「心情理解の弱さ」「メタ認知の弱さ」「感情表出の乏しさ」「想像力の弱さ」「セルフコントロールの弱さ」「ぎこちなさ・不器用さ」等が列挙されました。

【研究結果の効用・活用（生かし方）】

特別支援学級に在籍しているASDのある児童生徒の実態は、知的発達や適応状態の程度も多岐にわたっていることから、指導も多様性が求められています。

そこで、本研究では、視覚障害や肢体不自由特別支援学校の教育課程の編成を参考として、特別支援学級におけるASDのある児童生徒の実態から、教育課程の編成案を4タイプに分けて提案しました。

今後は、自閉症・情緒障害特別支援学級のASDのある児童生徒を対象に、教育課程の編成をする際の基準となるような教育内容も提案していきたいと考えています。

特別支援学級における自閉症スペクトラム障害のある児童生徒を想定した教育課程仮説案

在籍児童生徒の実態が多岐・多様→視覚障害や肢体不自由などの児童生徒の教育課程を参考に

Aタイプ（知的発達が標準）
学年相応の教科等+自立活動

Bタイプ（知的発達の遅れが軽度）
学年相応の教科等+下学年の教科等+自立活動

Cタイプ（知的発達の遅れが中度以上）
知的障害特別支援学校教科等+(下学年の教科)+自立活動

Dタイプ（知的発達の遅れが重度で行動上の課題が多い）
主として自立活動

*学年相応の教科等とは、特に交流及び共同学習の時間において受ける教科や領域を意味しています。

【関連情報】

特別支援学級においては、**知的障害等と重複した状態であれば、教育課程の編成において重複障害者の取扱うことができます。**その点も考慮し、**ASDのある児童生徒のための教育課程をより適切に編成し、実施するためには、以下の点に留意することが重要**です。

- 1) 特別支援学級には、学年が異なる複数の児童生徒が混在していることから、一部複式学級の考え方を取り入れる。
- 2) 自閉症の特性を念頭において、最初から大きな集団での指導形態が適しているか否か再確認する。特に、知的障害特別支援学級や自閉症・情緒障害特別支援学級等の合同授業が行われるケースにおいて、自閉症の特性を考慮する必要が想定される。
- 3) 対象児童生徒の交流及び共同学習のねらいを明確にするとともに、体育や音楽などの技能教科や道徳などが自閉症の特性から交流教科に適しているか再確認をする。
- 4) 交流及び共同学習を実施するにあたっては、交流先の学級の担当教員と対象児童生徒への対応について十分に協議し、特別支援学級担当教員の授業

- におけるTTによる支援が必要か否かを検討する。
- 5) 時間割を作成する際は、特別支援学級の時間割を優先的に取り扱うようにし、特別支援学級での指導と、交流及び共同学習の指導それぞれのねらいが達成できるよう考慮する。
 - 6) 教育課程に基づき、各教科等の指導における個々の児童生徒の具体的な指導目標や指導内容等を記載した個別の指導計画の作成により、指導の個別化を図る。

本リーフレットは、研究所で行った次の研究を基に作成しています。

【研究課題名（研究期間）】

重点推進研究「自閉症スペクトラム障害のある児童生徒に対する効果的な指導内容・指導方法に関する実際研究」
(平成20年度～平成21年度)

【研究代表者名／問い合わせ先】

廣瀬由美子 e-mail hirose@nise.go.jp